

昭和五十四年七月二十五日

発行（毎月一回・十五日発行）  
郵便物認可

（通第三四九号）

# 慈

# 光

第三十卷

第七号

## 次 目

仏智不思議を信ぜよ………	近角常觀	(1)
歎異抄のすすめ……………	田村実造	(8)
自照日誌抄(二)……………	西元宗助	(12)
聞思録抄……………	西元宗助	(12)
念佛詩抄……………	西元宗助	(12)
如來の声を聞く……………	花田豊吉	(15)
花田正夫……………	花田正夫	(18)
		(21)

# 仏智不思議を信ぜよ

近角常觀

るであろうか。

仏智不思議を信ずると否とは、他力真宗たると否との分水嶺である。これが人生上、如何ともすべからざる我等を救済したもう大威神力である故に、ひとたびこれを信する以上は、人生如何なる出来事に対しても必ずおのずから解決の方法があるものである。

そこで先ず信仰の一念に不思議の仏智を信する点より述べよう。そもそも現代（大正三年）の思潮について考へるに、一方には現実主義、自然主義、功利主義等があつて、徒らに結果を追うてほとんど手段の如何をかえりみず、みだりに自己の性情の欲する所をほしいままにして、底止するところがない。だから一方には律法主義、厳正主義、刑名主義が起つて、飽くまで是非善惡を明らかにし、勸善懲惡の方法によつて、時弊を矯正せんと試みるのである。

今や我国は思想界、教育界、政治界、宗教界に至るまでこの二傾向の戦いが頂上に達して、種々破天荒の出来事がおこっている。前者の不可なことは言うまでもないが、後者の方法が果して時弊を廓清して、清明の天地をひらきうる寒心すべきものがある。

今時、予の如きことを云う者はなかろう。併し信仰の眼から眞面目に考へて見るがよい。人間の誰か敢然として他人を罰し得る力があるか。こう云つたからとてトルストイの様に、裁判を否定するのでもなく、現実主義、自然主義、功利主義の味方をするのでもない。刑名主義の一辺で人生を救い得ると考へて偏重する刑事政策者流の蒙をひらこうために一言したのである。

然らば何を以て人生を救い得べきか、曰く仏智不思議である。仏智不思議とは何事であらうか。罪惡でもよいといふ横着主義ではない、煩惱でもよいといふ氣儘主義でもない、その横着な、我儘な我等に対し、飽くまで見捨てたまわぬ眞実の親心である。否、横着につづき、氣儘に行きつまり、律法主義、厳正主義、刑名主義の桎梏（しこく）に苦しめられて如何ともすべからざる地獄必定の我等に対し、無限大慈の涙をもつて我等が煩惱を悲憫したまう親心である。

この時局をいかにせん、これはいやしくも心あるものの胸中に自問自答せんとする問題である。しかも未だ眞の解決をきかぬ。現実主義、功利主義を生命とする政治界が解らぬのは無理もなく、律法主義、形式主義にとらえられる教育界の氣付かぬのも当然であるが、本願不思議を生

罪あれば禍を得、善あれば福を得るという罪福主義で人生を救済し得るとするならば、結局蔑視修善でやり通すことができるという自力主義である。

もとより邪見に陥りてこれが当世なりと云うて違法をあえてし、罪惡救済の名の下に放縱主義に走るのでは本当の解決にはならない。

飽くまで罪惡を救済し、煩惱を悲憫し、驕慢を懲悔せしめ、懈慢を慚愧せじめて、清淨なる光明中に攝取する道ではない。

近時刑事政策が国家唯一の威力となり、政治界、教育界、宗教界も、ほとんどその脚下に踏みにじられている状態であるのは、一時の臨機応急の策となつても、決して社会を根本的に救う道ではない。おそらくは人心をしてかえつて荒廃させるものではなかろうか。しかも一人としてこれをとがめる者もなく、上下共に冷眼をもつて、むしろ会心をもつてこれを迎えている傾向があるのは、将来こそぶ

命とする眞実者が、この信仰的解決をさとらないのは、あまりと云えばあまりではないか。勿論、この本願不思議が本当に生きて信じられて居れば、今日の時局は来る筈がない。いまこそこの本願の不思議を頂かねばならぬ様な時機に追いつめられているのである。警鐘は鳴つてゐる、火の手はあがつてゐるのである。他家の火事ではない、各々自家頭上に燃えつつあるのである。和讃に曰く、

釈迦、韋提方便して、淨土の機縁熟すれば

雨行大臣証として、闍王逆惡興ぜしむ  
信仰の機縁は正に純熟してゐるのである。

この際、制度、政策等の現実主義、功利主義をもつて救わんとするは、火を以て火を救わんとするのである。宗教界が俗界の眞似事をして火を救わんとするのは駄目である。また律法主義や厳正主義を今さら呼号して人を責めて居るのは何事であらうか。すでに刑名政策の律法主義の打撃によつて傷ついて井戸に落ちたものに、なお石を落とそうとするような残酷をあえてして、結局どうしようとするのであらうか。他家の火事のように高見の見物をしているが、すでに火が全般にまわつてゐるのに氣付かぬのであるか。實に煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界である。

嗚呼、そらごとなるかな、たわごとなるかな、虚偽なる

かな、不實なるかな。何等の策もなく、何等の術もなし、この如く、いずれの道も見出し得ない我等を悲憫したまうが本願の不思議である。

「煩惱具足の凡夫は、いざれの行にても生死を離ることあるべからざるを憐みたまいて、願を起したもう本意、惡人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」

この一大人生問題によりて直ちに本願不思議をいたぐべきである。

何ともして見ようがない、施すべき術がない、無策である、とても人間のはからいでは間に合わぬ。全体今まで人間の浅薄な猿智恵やら、虚勢をもつて世をあざむき得べし、人を誤間化し得べし、と思うのが間違いである。世のいわゆる政策、謀術なるものが皆駄目な所以である。

かくの如く人間の何ともして見ようのないものを憐んで下さるのが如来の大悲である。人間のはからいの絶えはてて、如來の遣る瀬ない御はからいにはからわれ奉るのである。こう云うからとて無為無策で茫然として居れというのではない、かくの如く、如何ともすべからざるを飽くまで見捨て給わぬ大悲大願が、誓願の不思議である、仏智の不思議である。すべからくこの不思議の仏智の下に我等の罪悪を慚愧すべきである、これが「義なきを義とす」である。

る、無策の策である。

ここに大いに注意すべき点がある。世人は自覺であると叫んでいる、しかし其自覺の何であるかを悟っていない。信心じや、唯信仏語じやと高く標榜したとて一体どうするのじや。かつて或人が念佛主義じや／＼というて倒れた人がある。晦巖和尚は火事の時、小僧が仏前に出て、消災陀羅尼を高唱して居つたら、水を頭からぶつかけて、寝とぼけるな！と叱つたという話がある。この際、信心じや、念佛じや、自覺じやというのは一体どうすることじや。

今日からは信仰でやると発表でもすることじやと思ふべからず、ソロソロ仏前に詣でて念佛することじやと思うべからず。今が実に私が常に云う仕て見ようのない時ではないか、仕て見ようのなき者を憐みたまうといふのは、実にこの時局を憐みたまうではないか「いすれの行にも生死を離ることあるべからざるを憐みたまう」というのは、今現に何んとも仕て見ようのないのを悲憫したものである、哀愍攝取したものである。これがかねて待ちかねたもう本願招喚の御呼び声である。

しかも、その本願のおぼしめしは、その悪しき者、苦しめる者、して見ようのないもの、煩惱具足の我等、破戒無戒の凡愚、五逆十惡の徒を飽くまで見捨てたまわぬ親心である。「ただ五逆と正法を誹謗するものを除く」と抑止さ

### 本願円頓一乗は、逆悪摂すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ

如何なる罪惡深重、煩惱熾盛の我等の心中にも、徹到せずんば止まぬ、という大誓願不可思議力である。

れた釈尊も、阿闍世王の逆惡がおこるや「我阿闍世のために涅槃に入らず」と仰せられた。これが如來の密語は不思議である。殺害された父ビンバシャラ王は、阿闍世王に対して「ギバ大臣の言に従うて、仏のみもとに詣すべし」と告命された。釈尊は阿闍世王に対して「汝罪あらば我等諸仏も亦罪あるべし」と仰せられた。七重の室内に幽閉された韋提希夫人に対して「汝今知るや否や、阿弥陀仏ここを去ること遠からず」と仰せられた。これ本願成就の尽十方無碍光如來を信知せよとの仰せである。和讃に

願力無窮にましませば 罪業深重もおもからず

仏智無邊にましませば 散乱放逸もすてられず

四方八方、見捨てて顧みるものない逆惡の我一人をたすけんと思し召したまいまし御苦勞が、五劫思惟の本願である、選択願心である、誓願の不思議である、仏智不思議である、不可称不可説不可思議の南無阿弥陀仏である。

然し、聞きようがわるいと、私の言も小僧の消災ダラニと同様に思われるものが多いであらう。そのような念仏なれば、定善の氣休め念佛、散善の努力念佛であろう。私の申すのは、いざれの行もおよびがたい地獄必定の私に対して、三世十方の間、唯一の救済の念佛である、大悲大願の大行である、淨土真宗の行である、選択本願の行である、円融至徳の嘉号、転惡成徳の正智である。

釈迦、弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し  
われらが無上の信心を 発起せしめたまいかり

真心徹到するひとは、金剛心なりければ

三品の懺悔するひととひとと宗師はのたまえり

これが即ち如来の不思議を信じたのである、仏智の不思議を信知したのである。

不思議の仏智を信するを

報土の因としたまえり

信心の正因うることは、かたきがなかになおかたし

これは即ち如来の加威力により、大悲廣慧力によつて信楽の開発する一念であり、広大難思の慶心があらわれるのである。人生問題において人々が信楽が開発するのは、唯この親心をきくばかりである、否、聞く一念に親心がとどくのである。無限大悲の親心に対して疑う余地がないのである、疑蓋無雜の信心歡喜である。信楽開発の一念である、これ不可思議の大信心海である、これ冒頭に掲げてきた、信仰の一念に仏智不思議を信することである。これ実に真宗の真面目である。

以上が、時局に対する徹底した解決である。ここに始めて我等迷妄の夢が醒めて、罪惡の我身たることを自覺して唯不可思議を信じ奉るばかりである。

念佛はまことに淨土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、縊じても存知せざるなり。一度仏智の不思議を信じ奉りたる以上は、時局

考えてはならぬ、如何なる場合に於ても我等を飽くまで見捨てたまわぬ本願不思議を疑うことが出来ないのである。否、現に我等は自力の立場をひるがえして、仏智不思議の御はからいを仰ぎ奉るばかりである。聖人が御消息に、仏天のはからいにまかせ奉るべし、と仰せられたのがこれである、仏智の不思議を信じ奉る一念の信心から、自然に流れ来る大きな人生觀である。

聖人は慈信房善鸞が、関東で聖人の弟子信者に対し、異義をすすめて多くの人々をまどわした場合でも、聖人は仏天の御はからいにまかせ候べしとだけ仰せられたのである。世は如何になり行くとも我等を飽くまでお見捨てない親心のましますことを頂いた以上は、たとい地獄の炎に焼かれるとも、天地が碎けることがあつても、さらには悔むところはないのである。

かつて私が或人と共に、現代の事について対話している時、或人は現在日本国民の精神上の貧弱について、中心から深く感慨して、これでは将来は亡国であると断言して非常に悲観され、真に痛歎骨髓に徹するものがあつた。私は唯々恐縮するのみであった、しかし私は決して悲観することはすこしもない。というのも他人のことではない、いざれの行も及びがたい地獄必定の私をあくまで見捨てたまわぬ親心がまします以上は、どんなに精神的に貧弱

は如何になりゆくか結果の如何をかえりみる余地はないのである。たとい法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。仏智不思議を信じ奉れば、たとえこれがために如何なる苦痛に陥りてもさらずに後悔はないのである。なんとなれば、この私のため、たとい身をもろもろの苦毒の中に置くとも、我が行は精進にして忍んでついに悔いと仰せ下さるお慈悲がありがたい。このお慈悲は私が必定地獄におつべきことを見捨てたまわぬ御心にてまします。

この慈悲を頂き奉れば、阿闍世の告白されたように、たとい無量億劫阿鼻地獄に落ちるも苦とせぬのである。いわんや時局が如何になりゆくとも更に後悔すべからず候である。かくてこそ時局は解決されたのである。

往生ほどの一大事、凡夫のはからうべきことにあらず、ひとすじに如來にまかせたてまつるべきなり、すべて凡夫にかぎらず、補處（ふしょ）のミロク菩薩をはじめとして仏智の不思議をはからうべきにあらず。まして凡夫の浅智をや、かえすがえすも如來にまかせ奉るべきなり。

これが徹底した時局の解決である。否、いかなる時においても徹底した解決である、また如何なる問題も言下に解決ができるのである。これが他力回向の解決である。しかし他力ということを、単に空しく成りゆきにまかすこと

であろうとも、お見捨てのない仏智不思議を信じ奉れば、人世がいかに暗闇になろうと、更に悲觀することも、失望することも全然無用であると申したことである。今時局に對して何等の策もなく、何等の術もないけれども、仏智不思議のまします限り、必ず心配するには及ばぬのである。

否、此の様な時局が現われて来るのも、つまりは如來の不思議、仏智の不思議を頂かねばならぬように導いて下さるのである。

大聖おののもうともに 凡愚底下的つみびとを

逆惡もらさぬ誓願に 方便引入せしめけり

前にも述べたように、これこそ淨邦の縁が熟したのである。淨業の機があらわれたのである、今やまさに淨土の教が興らんとする時機の純熟しつつあるのである、我等は唯大悲の深き思召しを仰ぎ奉るばかりである。聖人が「権化の仁、ひとしく苦惱の群衆を救済し、世雄の悲まさしく逆説、せんだいを恵まんと欲してなり」と仰せられるのがこれである。

以上、時局を如何にせんということは、單に時局にかかる人ばかりでなく、この際如何ともすべからずと感じる人は、皆同じく如來大悲の御恵みをいただきばかりである。信仰問題の上で云えば、一として他人のことではな

い、皆私自身のことである。この時局を他人のことのように思うのが間違いである。政治界にせよ、教育界にせよ、宗教界にせよ、功利主義や律法主義をもつてはどうしようもないことを自覚すべき時が来ているのである、選択本願が我等国民の上に開くべき機縁があらわれたのである。

本師源空世に出でて 弘願の一乗ひろめつつ  
日本一州ことごとく 浄土の機縁あらわれぬ  
時まさに来れり、各自大悲の弘誓を仰がねばならぬ。仏天はたしかに一大震雷を下して甘露の法雨をそそぎたまうのである

仏智不思議の誓願を 聖徳皇のめぐみにて

正定聚に帰入して 補處のみろくの如くなり

聖徳皇のおあわれみに 護持養育たえずして

如來二種の廻向に すすめいれしめおわします

往相回向の大行大信、還相回向の方便引入、これみな人のためではない。聖人のたまわく「つらつら彼を思い、静かに此をおもうに、ダイバ、アジャセ博く仁慈を施し、弥陀釈迦深く素懐をあらわせり」と嗚呼一切有為の衆生、煩惱具足の凡夫、未來のアジャセ王のためにねはんに入らずとのたまし如來はまた我等の上に居らせたま「此を去ること遠からず」の聖訓は古今をえらばず、我等の上にこうむるのである。いわんや「仏滅後の衆生、浊惡不善にして五

苦にせめられん」とは、實に正にその時である。定善、散善の自力のはからいで誤魔化し得べき事ではない。  
幸に尽十方無碍光の大慈大悲の名号と光明の父母、我等を呼び、我等を攝取したもうのである。我等この不可思議の願海に帰入し奉るべきである。念佛成仏是れ真宗を体得実現し奉らねばならず、往還の二回向、眞実の行信を獲得し慶喜し奉るべきである、實に悲喜の涙にたえぬ次第である。

近角師『春鶴帖』より

昭和七年十一月十日。

涅槃經の善巧の句義は、歎異抄第九章と同意なりと感じ、作有り。

為阿闍世王 阿闍世のために

不入涅槃章 涅槃に入らずの章は、

善巧大聖涙 善巧の大聖の涙にして

矜哀無尽藏 矜哀さること無尽藏なり

## 歎異抄のすすめ

師弟一如

第九条の本文は少し長いがつぎのとおりです。

念佛申しそうらえども、踊躍（ゆうやく）歎喜（かんぎ）の心おろそかにそうろうこと、またいそぎ淨土へまいりたき心のそうらわぬは、いかにと、そうろうべきことにて、そうろうやらんと、申し入れてそうらいしかば、親鸞もこの不審（ふしん）ありつるに、唯円房おなじ心にてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどに、よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定（いちじょう）とおもいたもうべきなり。

よろこぶべき心をおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為（しょい）なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおせられたことなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり

としられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。  
また淨土へいそぎまいりたき心のなくて、いさかかの所勞（へしょろう）のこともあれば、死なんするやらんと、心ぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。

久遠劫（くおんごう）よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養の淨土はこいしからずそうろうこと、まことに、よくよく煩惱の興盛（ごうじょう）にそうろうにこそ。なごりおしく思えども、娑婆（しゃば）の縁つきて、力なくしておわるときに、かの土（ど）へはまいるべきなり。いそぎまいりたき心なきものを、ことにあわれみたもうなり。これにつけてこそ、いよいよ大慈大願はたのもしく往生は決定（けつじょう）と存じそうちえ。

踊躍歎喜の心もあり、いそぎ淨土へも、まいりたくらいなましと云々。

この第九条は、煩惱（人間のさが）と、わたくし自身と、他力の悲願（弥陀の誓願）との三者の関係が、実にわかり易く語られている文章だと思います。第九条は第二条とともに歎異抄、いや他力信心の真髓をのべたものといえましょう。

この本文を読むと、唯円房もよく思いきって、すなおに

聖人に對して、ひごろの疑問を質問したものだと思いますが、親鸞聖人もまた、少しもかまえる（氣どる）ところなく、それに答えられていると思います。そこには師匠と弟子とが、赤裸裸（はだか）の心で抱（だ）き合っているさまが、眼に浮んできます。「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなし心にてありけり」（親鸞もいぶかしく気がかりであったのに、唯円房おまえも、そうであったのか）の会話には、師弟一如の世界が感じられます。

わたくしは、こここのところを読むとき、よく論語の孔子と弟子たちとの應答を連想しますが、論語のなかでは、孔子は弟子たちに對して、なんだかかまえているように感じられます。「親鸞もそうだが、唯円房お前もか」というよううに、しぜんに弟子のところまで下りてきて、その懷（ふところ）にとびこんでくるような、こんな場面はみられないうように思います。

よく多くの人が引用する「一人いてよろこべば二人とお

よたのもしく（心強し）思われてくるのです。

との一文であり、さらにつづいて、

また淨土へ急いで参りたい気になれず、少しでも体の工合でも悪いと、死ぬるんではなかろうかと、心ぼそく思われるのも煩惱のしわざです。永劫（ようごう）のむかしから迷いつづけてきた、この苦しみの世界（しゃば）は、容易にはすてきれず、まだ生れたこと

もない淨土（極樂淨土）は、少しも恋しく思われないのは、まことに、よくよく煩惱が強い身なのだと思います。

との一文です。ここまで読んでくると、逆説的と思えた表現も、もつともだと納得（なつとく）できたのではないかと思います。納得できたのなら、あなたはすでに絶対他力の信仰への道を一步も二歩も近づいてきています。つぎに、

なごりおしく思えども、娑婆（しゃば）の縁つきて、

力なくしておわるときに、かの土（淨土）へは参るこ

もへ、二人いてよろこべば三人とおもえ、その一人は親鸞ですぞ」とのことばも、あらためて生き生きと胸に迫つてくる感じがします。その意味で、わたくしには、あの紙一枚、すげがさ、わらじばきで杖にすがつていられる行脚（あんぎや）姿の親鸞像が一入（ひとしお）身近かにおぼえられます。

さて本文の「よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどに喜ぶべきことを、喜ばぬにて、いよいよ往生は一定としたもうべきなり」は、第三条の「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」の一文と同様に、普通の論理では逆説的とも思われますが、他力の信からいえば、まったくあたりまえの表現です。決して鬼面人をおどろかす態（てい）の、いいまわしをされたのではありません。この逆説的ともみえる表現を説明されているのが、

よろこぶべき心をおさえて喜ばせないのは煩惱のせいである。そのことを仏はかねがね見とおして、煩惱具足の凡夫（罪がふかい人間のさがをもつ身）だと經文（仏典）にいっておられることだから、他力の悲願（法藏菩薩に化して成就された願）は、このような凡夫のわれわれのためであつたのかと知られて、いよいよ相対応させたもので、憂（う）きこと多く、苦しみ多い

この世に、どこまでも執着するわれわれ人間の悲しい性（さが）が、「なごりおしく思えども云々」の短かいながに實によく表現されていると思います。またこの一文でもつて、すぐ前の「よくよく煩惱の興盛（こうじょう）にこそ」が、いつそう切実にひびきます。

さてみなさんは最後の

いそぎまいりたきこころのないものを、仏はことに哀れに思われます（仏の慈悲は深くかかります）。これについても、弥陀の本願はたのもしく、救いはまちがないものと思ひなさい。

天におどり地におどるほどの喜びがあり、急いで淨土へ参りたいなどの心がほんとうに起つたら、はて、じぶんは煩惱がなくなつたのだろうかと、かえつて怪（あや）しく思われます。それはわれわれの煩惱こそ救いのめあてだからなのです。

すが、「百尺竿頭一步を進める」を理くつでいいますと、

百尺の竿（さお）の尖端（さき）までは論理の世界ですか

ら理解のつみかさねで、たどりつけますが、それからさきの一歩は、竿のない、理解力をこえた次元のちがう世界です。そこには理解力や、理くつでなく、信によるしか到達する手段がないのです。

第一条に、

弥陀の誓願の不思議にたすけられて、往生をとげるんだ（救われる）と信じて、念佛申そうと思ひ立つ心がおこるとき、ただちに弥陀によつて攝取不捨のめぐみをいただける。

とあるのは、これをいったものですし、あるいは第二条の親鸞におきては、ただ念佛して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり

も信ずる以外に別の方のないことを行われたものです。

## 雲霧抄

筑紫野春草

今日は今日の希望に生きてすがすがし豊かに開く朝顔の花行く雲のあとをとどめぬがしさを求めて久しづがひぐらしに

ひとりひとりの内をのぞけばうそざむき独生獨死の黒きかげもつ

己が立てし人生観に捉われて己れと生きの世をせばめゆく

念佛自然の外なしといふわが意をばようやく解して莞爾たり友は

我がどちの誰彼をむごく批判すれど己が足もとは言はずたがいに

## 自照日誌抄(二)

—若さからの解放—

### 西元宗助

五月末の日曜日、毎年の例により、岡崎市の一通会に、花田正夫、榎原徳草両師のお伴（とも）をして参席。

ことは主催者の杉浦豊氏邸で行なわれる。四国の琴平から参られた方もあって、集つた者は約百名。莊嚴なお仏壇（だん）のある大座敷で鬼頭康彦氏司会のもと、花田、榎原両師のご法話を聴聞。故池山栄吉先生ましますが如しあつた。なお私も前座をつとめさせていただく。

まず、本日の一道会の案内のハガキも、毎月の『慈光』誌の表書も、すべて満七十四才の花田先生の直筆であることを述べ、われわれの中心の老先生に、このようなことまでしていただいている会を、寡聞（かぶん）にして私は知らないと前置きして、感話をのべる。

杉浦さん宅は、榎原夫人のご実家で、池山先生ご在世のみぎり、しばしば御法座のもたれたところ、それだけに懷

(なつか)しく有難い雰囲気（ふんいき）であった。なお岡崎医療刑務所長さんらも、浄土宗の尼さんたちも、膝をただして参聽しておられたのが印象に残る。

○

この春、『在家仏教』の責任者、協和醸酵の加藤辨三郎翁（工学博士）が、仏教伝道文化賞を受賞される。その加藤翁が、新聞記者に「誠心誠意といつても、どこかに卑下慢がある。なにを考えても、なにを言つても、あやしく濁っているのが人間—自分」と。その言葉に心うたれて、その記事を切抜いておく。

加藤さん御夫妻には、かつて金子大榮先生米寿の会で、お目にかかるせていただいたことがある。ともあれ、師事する「よき人」のあられる方は幸せであり、まちがいがす

くない。そのことをつくづく想う。

○

季刊『びたるか』(四号)に、大谷光真師(お西のご門主)と、文人として著名な岡部伊都子女史との対話が載(の)せられている。その中で、岡部さんが、

「わたしは大変、激(げき)しやすく、憎惡の念が深くて、ほんとうに自分だけ、よかつたらよい(という)人間なんです。そうなんです。それを知っているから、優しくありたいと思ってるし、他の人のことを考えないと申訳(もうしけ)ないと思っています。(略)

だけど、ようやく、その自分の本性(ほんじょう)といふか、どんなにいやらしい自分がということを分らせて貰つただけ、今日まで存命させてもらえたのが、大きな喜びです。もしも二十才で死んでいたら、わたしは今の私、その二十の時のわたしをにくむ(あわれむ)私をつくれてなかつた。

それで二十のとき死んでいたら、二十才の私でしかなく死んでましたね。そういう意味で、年をかさねるということは不細工(ぶさいく)になる、外側は袴(おとろ)えていくことですから人さまのご覽になりたくないような格好になつていくのですけれど、……自分ではもう、ほんとうに嬉しい。

わたしも娘のころは、なんでもんな年まで嬉しそうに生きてはんのかなと、思っていたこともあるんですねけれど、一年をとる一若さから解放されるテ、いうのは、なんともいえんもの。……年をとるっていうのは嬉しいもんやねんなアと。きたなくなつてきたお蔭で、見えてくるもんあるねんなア……」

と、さわやかに語つていられるのに、ハッと驚く。

ひとは皆、年をとるのはイヤなもの、殊に女性にはイヤな筈。それを麗人岡部さんは、若さからの解放とおっしゃる。そしてそれは、自己と人生を見る目の深まりの喜びとおっしゃる。光真師も深く感歎なさったことが、そのご応答のふしぶしにうかがわれる。

岡部さんの、今は亡き母堂は、よほど篤信の門徒でおありだったようで、「母が生きておりましたら、(さぞ)歎きますでしよう、(わたし)不信心で……」といつておられる岡部さんのお言葉のはしさにも、それが感じられる。それにこの岡部さんには、病弱の体質にもよるところの、美しい『末期(まつご)』の目々がおあります。詳しく述べてください。

なお、光真師は、華嚴經入法界品の善財童子のようにおありなさつて忝けない。願わくば、いつまでも、その初心の敬虔なお態度を持続なさいますよう念じたてまつる。

『びたるか』の申込先は、京都市下京区花屋町東中筋、学林町常楽音ミトラ社、一部四百円・送料別。

○  
自分が一番かわいいというおもい  
コソコソうごいている  
たれよりも

東大阪の榎本栄一さんから、さいきんの御詩集『煩惱林』(大阪市、東本願寺難波別院刊・定価千円)を頂戴する。

一つ一つ拝読拝見していると、翁のお顔が、なむあみだぶつと浮かんでくる。ある日、榎本さん宅を訪れて、木村無相さんの病状を案じお噂(うわさ)したおりの、翁のお顔もうかんでくる。例えば

## 足 音

夜 かすかな雨の音

風の音

これは 仏さまが

この人の世を

おあるきになる 足音です

## やどかり

この貝殻は

私がつくったものでない

天地さまから

お借りして

その日その日をすごしている

## 未 熟

世渡りを

七十年もけいこして

まだときどき つまづくとは

私の中 覗いたら  
お恥かしいが

## 私 の 中

聞思録抄

誉田豊吉

心と物

心は物に寓してその作用をあらわす。このゆえに、法・報・応の三身あり。仏心は弥陀となり、釈尊となり、歴代の高僧知識となりてあらわれたまう。

我等凡夫は、物にかかづらって心をいただくこと難し。釈迦・法然・親鸞などの諸聖の肉身を拝むことにかたよつて、その仏心を拝むことすくなし。

親鸞聖人の御歌に「恋しくば南無阿弥陀仏を称うべし、

われも六字の中にこそ住め」と。聖人は即ち南無阿弥陀仏なり。法然上人も「称名の聞ゆるところ、これわが遺蹟なり」と仰せられぬ。念佛即法然上人なり。

この故にわれらは物を見ずして、先ずその心を見ざるべからず。

同行を教え

同行は仏と一体の御方なり。同行の心中には、常に仏が居たまう。われ等は真の同行に接することに、生身の如来に対するおもいあるべし。

然るにわれらは、同じ信者にても、年齢の老少、容貌の美醜、学識の多寡、徳行の高低、地位の上下によって、尊敬の度を異にすることあり。愧すべし。

自然（伝わるお慈悲）

お慈悲をいただいた上からはつとめてお慈悲を他に伝えねばならぬと思うことがある。今から思えば実に僭越至極、身の程知らずである。わが力にてお慈悲が伝えられるならば、自分の方がお慈悲よりエライわけである。

自分は力なきものである。どうして他に広大なるお慈悲を伝え得るものか。お慈悲はおのずから働きたまうのである。おのずからひろまりたまうのである。罪惡のわが心にも入り満ちたまうのである。わが心に充满したまうお慈悲はおのずからあふれ流れて他をもうるおしたまうのである。われはお慈悲の機械となつて働くのである。

わが心に他にお慈悲を伝えたいとのおもいおこるときは、そは、お慈悲がかく思はしめたまうのである。自分の心がそんな殊勝なことを思うのではない。

自分の力では一人半人をも教化することは出来ぬ。自分は教化する身ではない、教化せられる身である。されど、仏智に催うされ仏の方便物となるときは、お慈悲は自分を通じておのずから他に伝わりたまうのである。実にお慈悲は自然にひろまりたまうのである。人間が自分の力でつとめてお慈悲を伝へんとするとは僭越である、不可能なことである。

信者日常の心得

常にお慈悲に触れ、お慈悲に護られる信念あるものは、日常これを意識せずとも可なり。たとえば眞の親に会いその慈悲を信するものは、日常親を思いおこさずとも可なるごとし。

お慈悲は常に心の奥の奥、無意識界に働きたまう。無意識界のことゆえ、お慈悲が如何なることを為したまうや知り得ざるも、お慈悲なれば必ずわれらがために見えざる手をもつて護りたまうを信ず。

お慈悲、家の主人公になりて奥深く座したまう。煩惱の手代は忠実に働いて他の取引きを一生懸命になす。手代の心にもおのずから主人の心が徹して行き、手代が一時あしきこころを起すも、直ちに主人にたしなめられて、恐縮、慚ずするなり。主人あるが故に何となく心強し。かくして主人手代を忘れず、主人を忘れず、一心同体と

なりて日常の仕事をはげむなり。われはたとい意識せずとも仏と共に働き、共にたのしむ、何等の幸慶ぞや。

仏の御恩

無常の思われるるも、罪惡の感ぜらるるも、因果の信ぜらるるもみな仏力なり。決して私の力にあらず。凡夫の自性にまかせば、到底無常も罪惡も感じ得ず、因果應報の信を得るなく、又無上の名号を称うることなく、ただ迷没流转、苦より苦に入り、冥より冥に進むより外なし。

仏はただに無常、罪惡、因果を知らせたまうのみにあらず、これらに繫縛せられて苦惱せるわれ等をたすけたまう。思えば広大無辺の仏恩なるかな。ああ身を粉にしても報すべし、骨を碎いても謝すべし。

我が機を見るな

喜ばれる時はおたすけ間違いなしと思ひ、喜ばれざるときはおたすけ如何かとあやぶむは、我が喜びの有無によつて救済をはからいおるなり。

人から信仰が深いといわれば往定決定と思ひ、又人から君の信仰はあやしいといわれれば、往生如何かとあやぶむもまた我が機を見て往生をはからいおるなり。

凡夫なれば喜ばれる時もあり、喜ばれぬ時もあるべし。喜びの多少にかかわらず仏は常に加護したまうなり。信仰の深いといわれるときは仏の御恩と喜び、信仰が怪しいと

いわれるときも、かかる奴を仏はおたすけ下さるとは、何たる御恩と喜ぶなり。

### 妄念に取り合うな

無我になれぬと歎く。我執が凡夫の地性だもの、無我になれるものか。無我になりたいとつとむ。自分の力ではとても無我にはなれぬ。若しなつたら直ぐこわれる。喜ばれぬと悲しむ。喜ばれぬのが凡夫の地性だ、喜ばれるものか。喜びたいと励む、自分の力で喜びは出来ぬ。もし喜んでもすぐに消えてしまう。

信ぜられぬともがく。信ぜられぬのが凡夫の地性だ、信ぜられるものか。疑いが晴れたいと勉める。けれども自分の力で疑いはとれぬ。一時疑いがやんでもまた起る。かかる心はみな凡夫の妄念である。如何に自らつとめても無我にもなれず、喜びもおこらず、また疑いもとれぬ。我は全く無力のものである。罪惡のものである。しかるに妄念をなくせんとつとむるは、あだかも天にのぼらんと企つが如し。

如何に妄念おこるとも、それに取り合うな。妄念に取り合ふから妄念が益々さかんとなる。無我になりたいと妄念が起るなら起らしめよ。その妄念に従つて妄念に取り合つて、無我になろうとするから益々無我になれぬ。疑う

まいと思うてもやはり疑いはやまぬ。疑う心に取り合うていては益々その疑いがやまぬ。故に妄念が起るなら起らしめよ。これをやめんと取り合うな。取り合えば妄念は益々はげしくなる。

### 唯仏を仰げ

妄念いかに起るともそれに関せず、かかる妄念に苦しむものを憐みたまう仏を仰げ。仏の御声を聞け。水火狂い襲うともそれには頓着せず「われよく汝を護らん」との呼び声をうけたまわり、一直線に白道を進め。

一向専念、仏の御声に向つて進むときは、いかに後より猛獸吼えるとも、それは耳に入らざるなり。貪欲の水、瞋恚の火、猛獸の激怒が心中に起るも、唯一向に仏に護られて進めば、彼等は害を加うる能わざ。もし自分でそれらに立ち向つたならば、忽ちに水火に溺れ猛獸に噛まれるなり。

我等は到底これらに打ち克つことは出来ぬ。若し自負して我に力量ありとて妄想してこれに対抗せば自滅をまねく。我は無力なりと感知し、かかる者を助け給う大力無比の御仏にたよらば、水火も群賊も害を加うる能わざなり。唯「我」をすべて仏に従う、是れ大安樂の法なり。

## 念佛詩抄

### 木村無相

言葉の中味のお心聞くこと

お心聞くこと

和上おおせに

和上 || 禿頭誠師

〃せめて念佛

十遍称えたら

助けてやろうとも

あるならば

わかりもしようが

絶対の他力ということは

いかにも難信である

よくよく聴聞せねば

ならぬ——

心おそろし

和上お歌に

〃おそろしき

鬼のようなる

心にて

仏のマネをするぞはずかし

手を合せるは

するぞはずかし

念佛申すは

信者のマネゴト

念佛せよとの仰せの中味は  
ただそのまで無条件で  
助けるぞよのん心——

言葉の中味のお心聞くこと

心おそろし  
鬼の心で――

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

心の奥に

心の奥に  
心の奥に  
心の奥に  
問題とのこと

和上おおせに  
表には

王法仁義をまもり  
ナニ一つたがわぬよう  
していても

心の奥に  
御廻向の信がなくては  
まつたく悪いのじや――

心の奥に  
心の奥に  
心の奥にが

問題のこと

夜明けすること

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

和上おおせに

〃秀存語録の中  
仏のお手もとにさえ  
夜が明けなば

わが心の虚実（こじつ）は  
ただすに及ばぬ  
と――

と――

わたしの心の

虚実はみなウソ

ただしたところで  
なんにもならぬ

無根と名づく。世尊、われもし如来世尊に遇わづば、まさに無量劫において大地獄にありて無量の苦を受くべしのところが、私なりにありがたく、ありがたくいたかせてもらいましたことであります。

私にあつては、われもし、聖人のこの無信の者というお言葉にもう遇わづば、でございます。御廻向の信心とは、この悪衆生、邪見、無信の者をして、如来お与えの名号をひとえにたのましめたもう。御廻向の信心こそは「無根の信」でございました。『信卷』の信樂釈において然るに無始よりこのかた一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて清淨の信樂無く法爾として真実の信樂無し、ここをもつて無上の功德に值遇しがたく、最勝の淨信獲得しがたし云々、

の仰せ又『文類聚鈔』の信樂のところ

然るに具縛の群萌、穢濁の凡愚、清淨の信心無く真実の信心無し、この故に真実の功德値い難く云々  
というところがはじめてどうにか読み通れたことでございました。よき言葉に遇うことはよき師に遇うことでございました。聖人こそわが隔世の恩師でござります。

「伊蘭子」とは、我身これなり。「栴檀樹」とは、即ち是れ我が心の無根の信なり。無根とは、われはじめより如來を恭敬することを知らず、法・僧を信ぜず、これを

法 信 抄

無 相

聖人の『唯信鈔文意』に

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

法 信 抄

無 相

聖人の『唯信鈔文意』に

「故使如來選要法」というは、「旣廻如來よろずの善の中より名号をえらびとりて、五浊惡時・惡世界・惡衆生・邪見・無信の者に与えたまえるなりと知るべし：」

ということをお知らせいただいて、やつと『信卷』末のところの、「伊蘭子」とは、我身これなり。「栴檀樹」とは、即ち

是れ我が心の無根の信なり。無根とは、われはじめより如來を恭敬することを知らず、法・僧を信ぜず、これを

# 如來の声を聞く

花田正夫

耳をたつればなつかしや  
あなたこなたにこがくれて

鳴く音をもらすほととぎす

の藤村の詩を引かれて池山先生が或時「京都の淀はほととぎすの名所であるが、歎異抄は如來の声を聞く名所である。それにはやはり耳をたてることが必要です、そうさえすればこの歎異抄という名所で、その声のきこえないはずはない」と云われた。

如來の声と云えば、何か異様に感じられる方もあるうが、具体的に云えば、本抄にある親鸞聖人のお言葉の中に、聖人であつて聖人ならぬ声をきくのである。どう思つても相対五分五分の人間としては言えないことば、そこに如來の絶対の智慧や、無限の慈悲にふれるのである。

しかし、そのおもむきは、名月に向つて綺麗だなアとたたえる時、月が人であれば、みんな太陽の照り返しです、と答えるであろう。聖人も、愚禿とも虚偽不実の身とも名告られて、ひとえに如来回向のめぐみを隨喜されている。

## 末通る大慈悲心（四章）

私が岡山医大に入学した春に父が亡くなつた。病状が段々と悪化し二、三の医師に立ち合つてもらつたが、手当も無いとのことであつた。その時父は五十七であつたが、病苦にさることながら、幼い弟達をのこして逝つた父は、言語に絶する苦しみが続いた。

せめてすこしでも慰められたらと、種々語りかけても、かえつて父は苦しむばかりであつた。そうなると枕頭に居ることが苦しくなり、裏庭に逃げ出して長歎息して大空を仰いだとき、フト「今生にいかにいとおしふびんとおもうとも、存知のごとくたすけがなければ、この慈悲始終なし」の四章のことばが浮かび、人間としての力の限界に立て苦しむ私の心底をよく理解して下さる方の心にふれ、自然にお念仏にかえらせていただいた。すると、どうにもならなかつた心の行きつまりが、不思議にも底が抜けて、再び父の枕頭に帰つて最後までみとることができた。

どんなに苦しいことも、それを暖かい心でよく知つて下さる人さえあれば、それに耐えて行くことができるることを知らされた。私にとって、四章のこの一句こそ、如來のみ声といいただいている。天命を知つて人事をつくすとでも云う境地、不治を不治と知つて、しかも捨てず、其時々々に

全く「親鸞私なし」であればこそ、その聖人の言動の中に、仏徳の照り返しをありありと仰ぐことが出来るのである。「人によるな、法によれ」とは有名な仏諦である。

## おへだてのないまこと（一章）

私がはじめて本抄を手にしたとき、仏縁の薄い身で、ほとんどがわからぬことばかりであつたが、一章の中の

「弥陀の本願には老少・善惡の人をえらばず」との一旬が胸を打つた。それというのも、それまで手当り次第に論語や聖書を開いて読んだけれど、教はみな立派であるが、私自身がついて行けないので自分に絶望していた時とて、眼を見張つたのである。今まで相対差別の世界しか知らない身に、おへだてのない大きな慈愛の声にふれたからであつた。そこに私のような愚鈍の者の安心して帰れるふるさとを知らされ、私の生涯たどるべき道が自然に定まつたのである。仏心の平等にしてさらにおへだてのないお声を聞いた大きなよろこびであった。

自分に出来るだけの努力をさせていただける道がひらけたのである。

## さるべき業縁の催せば（十三章）

この一句が私の心に刻まれたのは、池山先生が、六高から甲南高校に転勤される夏、お別れの夕食の時であつた。

「君方とお別れすることになつたが、『さるべき業縁のもよおせばいかなる振舞いもすべしとこそ、聖人は仰せ候いき』とあるように、煩惱具足の身として、これからさきの生活に、業縁次第では、どういう業報をうけるかわかつたものではない、自分は決してそんなことはやらないなどと断言できるものはない。しかし、世間からあきれられ、見捨てられるような業さらしをやらかしても、聖人ばかりは涙をもつて御一緒して下さる、お見捨てになることはない、云々」

と、話して下さった時からであつた。その後私の父も亡くなり、医大の三年になつた時であつた。それまでゴタゴタしていたけれど、どうにかすごしていいた私が、何かとお世話をなつていた恩人に對し、反抗心がやまず、内心に鬼や蛇に等しいものを見出し、どうにもこうにもならなくなつた時、「さるべき業縁の催せば、いかなる振舞もすべし」との聖人の仰せが強く心を打つた。

捨てられて身はなきものと思いしに、うれしや弥陀のひろい児となる、と云う歌もあるが、文字通りにそのよろこびにふれ、生れてはじめて、ありがたいなあ！と心がひらけたのである。

○これが二十四の秋であつた。夜明けと共に田舎の父の墓前に走つて御禮せすにはいらねなかつた、又この教の生きて流布している日本に生れたことをよろこび、過去の順逆の両縁共に、私が如来の慈懷に帰るになくてはならぬことばかりであつたと、大きくなづかされたのであった。

#### 親鸞一人がためなりけり

(総結文)

私が本抄を読みはじめてから、いつも疑問に思つたのは総結文の「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり云々」であつた。

弥陀仏は一切の衆生をおへだてなくおすべく下さるのに、親鸞一人がためとは、どうして仰言つたのであるうか。我々の相対的分別心からはうなづけないことばであつた。

池山先生は或時

久遠このかた子故の回向、わたし一人を片想い

の一首を示されて「親と子は二にして一、一にして二、である。子の一人一人に親は全分の心で向かう。だから子には私一人の親と感じる、そのように如来は、衆生の一人くして終る時かの土へはまいるなり。急ぎまいりたき心なき者をことにあわれみたまうなり」にいたつては、至極の大悲のおよび声が聞こえる。

私が大病の床にあって、ヒヨットしたら駄目かも知れぬと、死の横顔が映つてきた時、人間のどんな慰めの言葉も無意味となつた時、九章のこの一句がたつた一つの心の支えとなつた。こわがつて泣きさけぶ子が、親に抱きとられて、自然におそろしいものが消えるおもむきであつた。そこに念佛がうかび、そのなかから、死もまた我なり、の一句が云えたのである。それまでは概念として生と死は表裏である、必ず生れた者は死なねばならぬと頭でわかつても、情意の世界では、生きることだけを考えいて、死は飽くまで拒否していた身に、生と共に死を受け容れることができ、そこに、浄土への道が向うからひらけてきたのであつた。その後、すこし病が恢復すると、喉元すぎると暑さを忘れるのとえで、元の木阿弥になつてしまふが、一度ひらかれた道は、私の心の如何を問わず、常にひらかれているたのもしさがある。

「病もまた善知識なり」と永觀律師が云われているが、こうしたことの味えたのも病氣した機縁によるので、念佛裡にかえりみて、病もまた善知識と申せるようになつた。永觀律師は、非常にすぐれた方であったが、單なる学僧に

一人を一子のごとくあわれんで下さるので聖人はその仏心をそのままうけられての御述懐である」と、話して下さつた。

その時は、なる程それにちがいないとまでわかつたが、私に子がない、そこに直接に感得できなかつた。のちになつて、待て自分にも親がある、その親は私一人の親で、兄や弟が何人いても障げとならないことに驚き、このように自然に思うようになつたのは、私一人に全分の親の念力があつたからだと、大いにうなづかされ、聖人の常の仰せがそのまま私のことばと転じてきた。そこにも慈眼をもつて衆生をみそなわす、如來の声がきこえる。

#### 急ぎ淨土に参りたき心なき者を

(九章)

歎異抄の九章は随所に如來の実語がきこえる。「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなし心にてありけり」と、喜こべず、淨土の恋しく思えぬ唯円房に同座して下さる中にも如來の同事の大悲を仰ぐ。

更に「よろこばぬにてよいよ往生は一定と思いたもうべきなり」の一句にも、地上に聞くことの出来ぬ、一切相対差別心しかない人生にはありえぬ、無窮の大悲の声がつたわつてくる。

最後の「名残りおしくおもえども娑婆の縁つきて、力なならず仏法者になれたのは、病弱であつたおかげであるとよろこばれたのであつた。

#### かえりてわが法を破謗するに非ずや

(十二章)

某米人牧師が、仏教は偶像崇拜である、消極であると非難しているとき、身を持つ反抗心がおこり、消極のない積極はいのしし武者である、等々と弁明やら、慢心やらが湧きおこった時、十二章の「わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなり」というほどに法敵もいできたり、謗法もおこる。これしかしながら自らわが法を破謗するにあらずや」の一節がピーンと胸にこたえ、振り上げた手が自然にさがり、慚愧させられたことである。

限りなき歎異の涙唯円の心もしらで五十路すぎゆくと日誌にしるしたのもその時であつた。

## あとがき

近角先生の原稿は大正の初め、第一次大戦後の混乱期に提唱せられたもので、船成金、米騒動等々続き、私は中学の寄宿舎で外米の臭いのに閉口したこと覚えていた。

この時、絶対の大悲、善惡、智愚、をこえた仏心のまこと一つを全靈こめておのべ下さったものであるが、現在の世相にも強く教えられるものがある。

田村様は歎異抄九章のこころをこまかく信証して下さって師弟一如の世界を知らせていただきました。

西元様は、善財童子の求道物語を地にして下さるおもむきの原稿をいただきました。善財童子は、文殊菩薩の智光を光背にうけておりますが、念佛者は智慧の念佛に照護せられての淨土への旅であります。私共の信の生活に鏡とさせて頂きたいものです。

## 急 告

八月一杯講話を休ませていただきます。

田の人や御免そらえ  
蚊帳の中

の一茶の句を思い懐じております。

菅田豊吉氏はすでに亡くなれて久しいのですが、京都市左京区高野泉町四〇、文明堂から聞思録抄を再版されましたので、その中から出させて頂きました。福岡県で教育界に終始され、近角先生の教をも受けられました、教育の根底に信の光をもつてせられました。そうしたお生活の中での心の日記とでも申せる記録であります。

木村さんは、病も平穀、自身の体力の限度を自覚せられて、七月の一応の退院を目

標に療養を続けていられます。来月から

二、三回に分けて、「私の詩と信仰」のラジオの宗教の時間に放送されたものに加筆して在家仏教誌にのせたものを転載したいと存じます。

- 毎月第一、二、三日曜、午後一時半。  
一道会例会。
- 昭和区駈上町二の八八。花田宅。  
市バス、新郊通り一丁目下車。東入る三筋目、左入る。地下鉄、新瑞橋下車。
- 毎月二十四日、午前、午后。  
名鉄、呼続下車。
- 市バス、御器所通り、又は北山下車。  
地下鉄、御器所通り下車。
- 毎月七日、午後一時半。  
〔日曜は変更〕  
尾西市三条板倉、蓮光寺、修道会。  
名鉄、新一宮駅よりバス、西三条下車。

- 次に、例年通り八月一杯は日曜講話も外での法話会も休ませていただきますが、私の勝手をお海容願います。夏期は各地で講習会なども盛大でありますのに、まことに恥じ入る次第であります。

定 価 半 年 七〇〇円（送共）  
一 年 一四〇〇円（送共）

編集・発行人 花田 正夫

電話八二二局七〇三七番  
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印 刷 人 坂 部 光 雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七

## 御案内